

「ジェンダーの視点に基づく美術史研究の現在」

美術史の領域は、ジェンダー研究において必ずしもそのあり方が広く理解されている領域ではないかもしれない。美術史学の中心的課題は従来美術作品の作者や素材、技法、制作年代、制作状況等の同定など基礎研究に始まり、作品の造形的な表現形式、すなわち様式、および図像や主題の分析や解釈、歴史的 position 付けなどであるとされてきた。しかし、1970年前後のフェミニズムをはじめとする社会運動の隆盛に加え、ポスト構造主義に代表される人文学的な知をめぐるパラダイム・シフト、そして現代美術を通じた社会における美術のあり方やジェンダーをめぐる問いかけ、モダニズム批判とも結びついた制作現場や批評の動向は、美術史という学問領域にジェンダーの視点が本格的に導入される契機となる。

美術史学におけるジェンダー視点の導入の嚆矢とされる1971年の美術史家リンダ・ノックリンの「なぜ女性の大芸術家は現れないのか？」¹と題する論考は、芸術家個人が内包する「天才」と呼ばれる神秘的な力に基づくとされた「偉大な芸術家」の神話を揺るがし、それによって隠蔽されていた芸術を取り巻く教育や制度、社会通念における非対称なジェンダーのあり方を問題にした。ノックリンは社会から切り離されたものとして聖化されてきた芸術をめぐる神話を否定し、その社会的な諸条件に目を向けることで美術におけるジェンダーの問題を顕在化させた。この問題提起に始まった美術史におけるジェンダーの視点による捉え直しは、さらに、グリゼルダ・ポロックとロジカ・パーカーの1981年の著書²において展開され、芸術を取り巻く概念、言語そのものがジェンダー的なバイアスを帯びていることを明らかにし、批評のステレオタイプや、絵画・彫刻といったいわゆる大芸術と、手芸や装飾との間のヒエラルキーとジェンダーの非対称な重ね合わせ、記号化され、意味を付与され、構築されてきた女性イメージのあり方等々の問題が取り上げられた。

こうした視点は、これまで社会から切り離され、異性愛白人男性中心に語られてきた美術

-
- 1 Linda Nochlin, "Why have there been no great women artists?", *Artnews*, January 1971, pp.22-39, reprinted in Linda Nochlin, *Women, Art, and Power and Other Essays*, London, Thames and Hudson, 1988, pp.145-178. (邦訳: リンダ・ノックリン「なぜ女性の大芸術家は現れないのか?」松岡和子訳、『美術手帖』1976年5月号、46-83頁)。美術史学とジェンダーの概観について以下の拙論も参照: 「美術史学とジェンダー」公益財団法人日本学術協力財団編『学会議叢書29 人文社会科学とジェンダー』公益財団法人日本学術協力財団、2022年、57-72頁。
 - 2 Rozsika Parker, Griselda Pollock, *Old Mistresses: Women, Art and Ideology*, London, Pandora Press, 1981. (邦訳: グリゼルダ・ポロック、ロジカ・パーカー『女・アート・イデオロギー フェミニストが読み直す芸術表現の歴史』萩原弘子訳、新水社、1992年)。

史そのものを書き換え、主流の視点に基づく大文字の美術史から、多様な視点による小文字で複数の美術史へととらえ直すことを通して、美術史学におけるパラダイム・シフトを実現する意図を明確にする。当然とされてきた「芸術家」や「創造者」、「表現」といった概念や、芸術生産の制度や状況を問い直し、美術をはじめ日常に及ぶ広範な視覚的イメージを表象として捉え、社会的な意味作用の体系を分析し、さらに精神分析学等の援用を通して視覚表象をめぐる眼差しの権力や、美術のカノンにおける男性中心主義的構造を明らかにすることによって、ジェンダーを社会的に構築し、性に集中する快楽のメカニズムと管理を組織化し、セクシュアリティを規定する、視覚表象の役割を検討することになる。加えて同時代のフェミニズム・アートの展開と連動しながら、80年代、90年代を経て、階級、「人種」、民族、ジェンダー、多様な性自認やセクシュアリティなどの錯綜した相互関係を踏まえたインターセクショナルな美術史における分析の視点が展開されてゆく。

今日、従来の男性中心の主流のカノンから排除されてきた膨大な視覚表象の実践とそれに携わった者たちの歴史の実証的研究を含めて、あらゆる時代や地域の多様な研究領域において、美術とジェンダーをめぐる様々な問題が取り上げられ、方法論的理論的検討が展開されている。視覚表象は、芸術作品から広告や大衆イメージなど多様なメディアに及ぶ広範な社会的領域に浸透して私たちの認識を形成する。美術史におけるジェンダーの視点による関与は、こうした視覚表象一般を、社会や歴史と結びつけ、欲望と深く関わるイデオロギーが再生産される重要な場として批判的に分析し、抑圧的な構造を差異化するにあたって有効かつ不可欠な理論と実践を展開する。それはこの社会を生きる私たちにとって不可欠な知の領域であると言えるだろう。

日本においても1990年代以降本格的に導入されたジェンダーの視点による美術史研究は、欧米の研究動向を踏まえ、日本、東洋美術の領域を含めて、継続的に展開されてきたが、その一方で、日本の社会的知的領域におけるジェンダー視点の希薄さとも相まって、学問的理論的意義が十分に浸透しないまま周縁化され、若い研究者の参入が妨げられる状況が続いてきた。しかし近年美術の現場にいる若い世代においてジェンダーに対する関心が高まってきているのも事実である。日本の美術史においてジェンダーの視点に基づく研究がスタンダードなベースとしての広がりを持つに至らなかった現状は、欧米等における理論的展開や方法、問題動向を検討し、新たな視点から捉える学術的な議論を深める機会が必ずしも多く得られてこなかったことと結びついている。

本特集はこうした状況を踏まえて企画されたIGSシンポジウム「ジェンダーの視点に基づく美術史研究の現在」(2021年12月18日)の報告を踏まえ、各論考の具体的問題を通して、ジェンダーの視点に基づく美術史学研究の現在地的一端を捉える機会とした。加えて現在のジェンダーの視点に基づく美術史研究をリードする一人である、ロンドン大学のタマル・ガーブ教授による、2019年にお茶の水女子大学で行われた美術史学会主催の講演の元となった論考を訳出することで、ジェンダーの視点に基づく美術史学における国際的な交

流を記録するとともに、海外における研究動向を合わせて見据える構成とした。本来美術史研究の多様な分野からの成果を持ち寄るべきだが、今回の特集では、私たちを取り巻く日常的なイメージや写真を含めて、主に 20 世紀を中心とした日本及び西洋における事例研究に加え、シンポジウム発表時の香川檀さんによるコメントも合わせて掲載することで複数の視点からの開かれた議論を目指した。

この企画に参加してくださった皆様はもとより、今回の特集の機会を与えてくださったお茶大ジェンダー研究所及び機関紙『ジェンダー研究』の皆様、とりわけ編集長の申 琪榮先生に、心からの感謝の意を表したい。

2022年7月

天野知香

- 1 編集のことば 申 琪榮
- 2 巻頭言 天野知香

特集

ジェンダーの視点に基づく美術史研究の現在

- 9 現代社会の表象におけるジェンダー美術史的方法論の導入 —— 近現代日本の〈海女〉の表象を例に
吉良智子
- 25 エロスの政治学 —— 1960-70年代の「日本の」美術
中嶋泉
- 43 モダニズムと「女性」芸術家 —— ロメイン・ブルックスのサフィック・モダニズム
天野知香
- 65 戦時下を生きた女性画家と“越境” —— 長谷川春子・谷口富美枝・新井光子
北原恵

特別寄稿

- 85 ジェンダー視点が拓く美術史・イメージ研究の地平 —— 4 報告への応答
香川檀
- 97 コンスタンス・スチュアートの戦争 —— 女性と記録写真の剰余
Constance Stuart's War: Women and Documentary's Excess
タマール・ガーブ (内山尚子訳)

投稿論文

- 119 公共政策における「交差性」概念の有効性と課題 —— 理論的枠組みと批判的実践という観点から
高橋麻美
- 139 アニメーション的な誤配としての多重見当識
—— 非対人性愛的な「二次元」へのセクシュアリティに関する理論的考察
松浦優
- 159 「法のまえ」に現れる身体 —— コーネルとバトラーの基本概念的批判的統合をもとに
長野慎一
- 177 語ることと語り出すこと —— 性暴力とトラウマケアをめぐるアイデンティティに関する考察
井上瞳
- 197 中国本土におけるインディペンデント・クィア映画史の再構築 —— 新しい分類法を用いて
于寧

書評

- 219 シンシア・エンロー (望戸愛果訳) 『バナナ・ビーチ・軍事基地——国際政治をジェンダーで読み解く』人文書院
小ヶ谷千穂
- 222 Mikiko Eto, *Women and Political Inequality in Japan: Gender-Imbalanced Democracy*, Routledge
村上彩佳
- 225 Jan Bardsley, *Maiko Masquerade: Crafting Geisha Girlhood in Japan*, University of California Press
G.G. Rowley
- 228 Chelsea Szendi Schieder, *Coed Revolution: The Female Student in the Japanese New Left*, Duke University Press
Setsu Shigematsu
- 231 謝花直美 『戦後沖縄と復興の「異音」——米軍占領下 復興を求めた人々の生存と希望』有志舎
金美恵
- 234 小島庸平 『サラ金の歴史——消費者金融と日本社会』中央公論新社
李素軒
- 237 元橋利恵 『母性の抑圧と抵抗——ケアの倫理を通して考える戦略的母性主義』晃洋書房
古久保さくら
- 240 田中東子編 『ガールズ・メディア・スタディーズ』北樹出版
関根里奈子
- 243 井谷聡子 『〈体育会系女子〉のポリティクス——身体・ジェンダー・セクシュアリティ』関西大学出版部
鈴木楓太
- 246 日下渉／伊賀司／青山薫／田村慶子編
『東南アジアと「LGBT」の政治——性的少数者をめぐって何が争われているのか』明石書店
福永玄弥
- 249 鄭喜鎮編 権金炫伶／鄭喜鎮／欄砦昀／ルイン (申琪榮監修・金李イスル訳)
『#MeTooの政治学——コリア・フェミニズムの最前線』大月書店
伊田久美子
- 252 Masako Ishii-Kuntz, Guro Korsnes Kristensen and Priscilla Ringrose eds.,
Comparative Perspectives on Gender Equality in Japan and Norway: Same but Different?, Routledge
Yuko Onozaka
- 255 パトリシア・ヒル・コリンズ／スルマ・ビルゲ (小原理乃訳／下地ローレンス吉孝監訳)
『インターセクショナルリティ』人文書院
飯野由里子
- 258 竹家一美 『日本の男性不妊——当事者夫婦の語りから』晃洋書房
菅野摂子
- 261 キム・ジヘ (尹怡景訳) 『差別はたいてい悪意のない人がする——見えない排除に気づくための10章』大月書店
梁・永山聡子
- 264 斎藤美奈子 『挑発する少女小説』河出書房新社
河野真太郎
- 267 小川公代 『ケアの倫理とエンパワメント』講談社
片山亜紀
- 272 編集後記
- 274 編集方針・投稿規定

